

# めぐみイエス・キリスト教会

2022年12月4日(日)第一主日アドベント礼拝  
週報「通算第635号」



## 2022年標題聖句

### 第 I テモテへの手紙御6章17節～19節

《高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませて下さる神に望みを置き、善を行ない、立派な行ないに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。》

第一礼拝(教会にて) 毎週日曜日 午前10時～11時

第二礼拝※中止

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実  
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

## ◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】		
【賛美Ⅰ】	新聖歌68「久しく待ちにし」	p. 90
【交読文】	No.52 ルカの福音書第1章	p. 921
【賛美Ⅱ】	新聖歌75「神の御子は」	p. 102
【使徒信条】		
【主の祈り】		
【先週説教】		
【賛美Ⅲ】	新聖歌77「きよしこの夜」	p. 105
【聖書朗読】	使徒の働き21章15節～19節	p. 279上段左側
【礼拝説教】	《エルサレム到着》	
【聖餐式】		
【賛美Ⅳ】	新聖歌165「栄光イエスにあれ」	p. 235
【平和祈り】		
【頌 栄】	新聖歌63 「父・御子・御霊の」	p. 85
【祝祷後奏】		

### ※本日の聖書「使徒の働き21章15節～19節」

21:15 数日後、私たちは旅支度をしてエルサレムに上って行った。

21:16 カイサリアの弟子たちも何人か私たちに同行して、古くからの弟子である、キプロス人ムナソンのところに案内してくれた。私たちはそこに泊まることになっていたのである。

21:17 私たちがエルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。

21:18 翌日、パウロは私たちを連れて、ヤコブを訪問した。そこには長老たちがみな集まっていた。

21:19 彼らにあいさつしてから、パウロは自分の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ説明した。

## ●ポイント1.「キプロス人ムナソン(マナソン)」とは？

■ムナソン パウロの初めからの弟子で、バルナバと同じようにキプロスのユダヤ人であった。パウロが死を覚悟してエルサレムへ上る途中、ムナソンの家に泊ることになっていた。このことからパウロとは親しい関係にあったことが分る。

## ●ポイント2.「ヤコブ」とは？

■主の兄弟ヤコブ 主イエスが十字架上で死ぬ以前は、主を信じなかったが、主の死後、復活の主の顕現に接して以来、主を信じ、弟子たちの仲間に加えられた。彼の名前が他の兄弟の中でいつも最初に記されている事から、彼はイエスに次ぐ年長者であったと思われる。ヤコブはエルサレム教会が組織された最初から、その教会の重要な地位にあり、最初の牧師であった。ヤコブは、殉教の死を遂げたと伝えられている。

## ※ガラテヤ人への手紙1章18節～19節「最初の出会」(新約p.375)

1:18 それから三年後に、私はケファ(ケパ)を訪ねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間滞在しました。

1:19 しかし、主の兄弟ヤコブは別として、ほかの使徒たちにはだれにも会いませんでした。

## ●ポイント3.「パウロは自分の奉仕を通して神が～説明した」とは？

### ※イザヤ書42章8節「私(神)のしもべへの言葉から」 (旧約p.1236)

42:8 私は主、これが私の名。私は、私の栄光を他の者に、私の栄誉を、刻んだ像どもに与えはしない。

### ※ルカの福音書17章10節「主イエス様のたとえから」 (新約p.153)

17:10「同じようにあなたがたも、自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

## ◎先週の礼拝メッセージ【第二回目の警告】

《パウロ一行はカイサリアに到着しました。何と、そこにはピリポが住んでいたのです。このピリポは、エルサレム教会において選ばれた七人の執事の一人でした。ステパノの殉教後に起こったサウロの迫害によって、エルサレムを離れ、カイサリアに伝道の居を構えていたのです。ピリポには、預言をする未婚の娘が四人おりました。聖霊は、かつての迫害者サウロと、殉教したステパノに次ぐ執事であったピリポとの和解を成させる為に、あえてカイサリアに導いたとも考えられます。

ピリポの家にしばらく滞在していると、エルサレムの預言者アガボが下って来ました。このアガボとパウロが会うのは、10年ぶりとなります。かつて彼は、アンティオキア教会において、世界中に大飢饉が起ると御霊によって預言し、それが紀元47年に起こったのです。

アガボは、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、「この帯の持ち主を、ユダヤ人たちはエルサレムでこのように縛り、異邦人の手に渡すことになる」と預言しました。それを聞いた人々は、エルサレムに上って行かないようにと懇願したのです。しかしパウロは、エペソにおいて、御霊の導きを受け、エルサレムを目指していたのです。

「あなたがたは、泣いたり私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は主イエスの名の為なら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しています」この言葉は、シモン・ペテロが、「たとえ、あなたと一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません」と、酷似してはいないでしょうか。

パウロがエルサレムに行く事は確かに神様の御心でした。しかし、時期が異なっていたのではないのでしょうか。すべての事に時があるのです。私たちも、静まって神様の導きを求めなければならない状況に置かれることがあります。その時には、まず留まるべきなのです。》

### お知らせ

※第二主日アドベント礼拝は、12月11日(日)です。通常通り、教会において行ないます。クリスマス礼拝は、12月25日(日)となります。